

メディアを通じた自己開示に外向的性格特性は影響するのか

氏名 大西 環

指導教員 日道 俊之

研究背景

自己開示には個人差があり、対面よりも非対面の方が自身の内面を語りやすいと感じる者もいる。自己開示には段階的な深さがあり、用いられるメディアによって自己開示量に差が生じることが指摘されている。外向性が高いほど自己開示量が高くなる一方で、外向性と自己開示の関連は一樣ではなく、メディアの特性によって異なる様相を示す可能性がある。さらに、個人の外向性とメディアの組み合わせが自己開示に及ぼす影響については十分に明らかにされていない。

研究目的

本研究の目的は、個人の外向性と自己開示の関係がメディアによって異なるかを明らかにすることであった。外向性について顕在的な指標だけでなく、潜在的側面からの影響を検討することも目的であった。

調査・分析方法

参加者は、潜在的外向性を測るために紙筆版 IAT を行い、顕在的外向性は既存の尺度を基に測定した。また、3つのメディア(対面・音声通話・テキスト)でどの程度自己開示しやすいかを自己開示の段階ごとに調査した。

分析結果

分析の結果、顕在的外向性高群と低群の間で、自己開示レベルⅡ・Ⅳで自己開示量に有意差もしくは有意傾向がみられた一方、潜在的外向性高群と低群の間には有意差がみられなかった。また、対面・音声通話がテキストよりも自己開示しやすいメディアであることが明らかになった。潜在的外向性群とメディア条件の交互作用は自己開示レベルⅡ・Ⅲ・Ⅳで有意差もしくは有意傾向がみられた一方で、顕在的外向性群には交互作用はみられなかった。

考察・結論

メディアごとの自己開示と顕在的・潜在的外向性との関連を調べた結果、テキストが対面・音声通話と比較して自己開示しにくいメディアであることが明らかになった。また、自己開示レベルⅢは、自己開示レベルⅡよりも開示しやすい内容であったため、自己開示レベルⅢでは、顕在的外向性の高低で群間差が認められなかった可能性が示唆された。自己開示行動は単一の要因によって規定されるのではなく、メディアの特性、個人の性格特性、測定方法といった複数の要因が相互に関与する複雑な過程であることが示唆された。